Field Report of the World

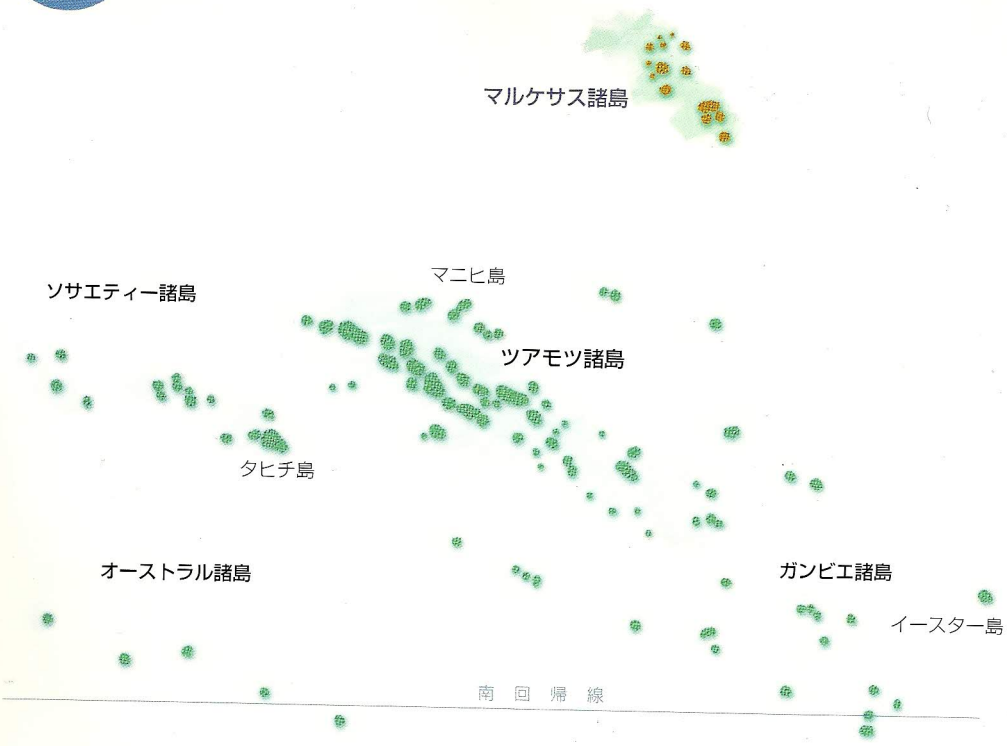
マルケサス

EXPEDITION TO THE MARQUESAS

諸島の探検記

南太平洋フレンチポリネシアに浮かぶ火山諸島、マルケサス。他の島々とは異なり、原住民が多く住むこの島には、観光業が発達しておらず、滅多に人が訪れることはない。そんな異彩を放つマルケサス諸島は、その海の様子もまた他とは違った魅力にあふれている。海中にはサンゴ礁はほとんどなく、独特の景観を呈しているが、マンタ、ハンマーヘッドが群れをなすダイナミックな光景や、このあたりにしか生息していない特産の魚達も多く見られるという。実際に探検の扉を開いたら、どんな生き物達が迎え入れてくれたのだろうか。

Written by John P. Hoover
Translation by Hiroyuki Tanaka



いざ、ドラマチックな秘境へ

マルケサス諸島は、南太平洋にあるタヒチの北東、約1200kmに浮かぶ山岳の多い島々である。ドラマチックだが滅多に人が訪れる事のないこの諸島は、大まかに2つのグループに分けられている……北にある6つの島と南にある4つの島、それに幾つかの小さな島で構成される。南にあるヒヴァ・オア島は最も大きな島で58haの広さがあり、標高1272mの山を頂いている。フランスの画家ポール・ゴーギャンはこの島に眠っている。次に大きいのが諸島の中心となるヌク・ヒヴァ島であり、北側に位置しここには高さ1224mの山がある。若き船員ハーマン・メルヴィルはここに錨を降ろし、この島での数々の奇妙な体験を基に、有名な小説“タイピー”を書き遺した。

マルケサスはフレンチ・ポリネシアにあって、地理的にも文化的にもかなり異色の存在である。ヨーロッパ人が移り住んで来たのが1595年の事で、最も早かったのはスペイン人達だった。彼らはここの住民達にペルーの統治者の名前をあてて呼んでいた。大部分のマルケサスの先住民達は、彼らヨーロッパ人が持ち込んだ流行(はやり)病で死んでしまった。現在これらの島々には7500人が残るに過ぎない。ほとんどが原住民でヨーロッパ人は少数派である。だからこそ彼らは自分たちの文化に非常に誇りを持っていて、お互いに顔見知りで、貧困もなければ犯罪さえもない生活を送っている。通信手段や交通機関も発達していて、道路も完備、病院施設も整っている。しかしそれ以外は未開発の部分が多く、農産物、ほとんどがコプラとバニラなのだが、これが主要な経済的資源となっている。観光業に至ってはほとんど何もやっていないに等しい。

ここは火山諸島であるため、海面から急に陸が立ち上がっている。また外海には波を遮るバリア・リーフがない。景観は目を見張る程素晴らしく、例えばヌク・ヒヴァのヴァイボの滝は400mの落差を持つ、世界有数の瀑布だ。毛羽立った岩肌にある峰々や針のような尖った岩は、青々とした渓谷をあっちこっちで寸断し、とても人が住める環境ではない。今は苔の生えてしまった石でできた家々や、お寺の境内を見ると以前は彼らの生活水準は極めて高かった事がわかる。入り組んだ美しい湾は、潮の干満で形が大きく変化する。

海底は地上と同様興味深いものだった。サンゴと呼べるものはほとんどなく、また時に視界も良くなかったのだが、プランクトンが豊富なようで、ここでは海洋生物を数多く見る事ができた。マンタやハンマーヘッドは群れを成し、大変多かった。珍しいはずの鯨の一種メロンヘッド・ホエール(*Peponocephala electra*)は、ヌク・ヒヴァ島では時に数百、いや1000頭も見る事ができたのだった。ここでは岩礁域の魚達も実に豊富で、ここでしか見られない種類もあるのだ。ジョーン・ランドール博士とジョーン・アール氏の2人が準備中の論文によると、12%もの魚が特産種であると言う。世界でも稀に見る高い率を誇り、これを凌ぐのは僅かにハワイ(23%)とイースター島だけである。

このように特産種が多いのに、魚の種類はと言えば他のフレンチ・ポリネシアの海域、例えばたったの480kmしか離れていないツアモツ諸島などと比較して、あまり多いとは言えない。海流の流れが微妙に変わっており、魚達が要求する餌があまりない事も一因だろう。何故ここにサンゴが発達しないのかはわからないが、我々はほとんど珊瑚礁を見なかったし、サンゴは6種類にも満たなかったのである。*Pocilloporid*属の枝サンゴの1種は、恐らく最近のエル・ニーニョ現象のお陰で姿を消してしまったのだろう。季節毎に見られる冷水塊出現とエル・ニーニョの温水塊出現の繰り返しで、サンゴ群にダメージを与えていると見られる。しかし確かな根拠がある訳ではない。私の問いかけに、未だにどの学者達からも回答が得られていない。

1999年10月に我々一行はマルケサスでの探検旅行を実施した。昆虫学者、貝の専門家、そして魚類学者などが参加し、皆それぞれお目当てのものを捜しに出かけたのだった。我々は2つの島を訪ねてみた。ヌク・ヒヴァ島は中心の村タイオハア、ウア・ポウ島はハカハウのゲストハ

特産種が乱舞する海

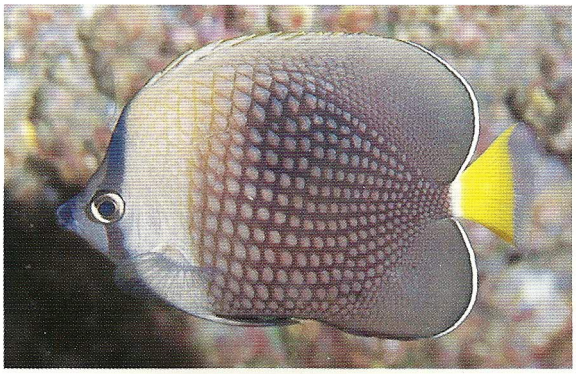
ウスに泊まった。昆虫に目のない連中は、昼間の大半を使い渓谷に沿って川を上ったり、高い峰によじ登って捜しまくった。貝に夢中の連中はまるで熱病にでも侵されたように、夜でも潜って珍しいタカラガイ、イモガイなどを拾い集めた。魚類学者ジョーン・アールとロス・ロバートソンの2人は、今後のDNA鑑定の為にと、特産魚の組織片を集めていた。私はただのんびりと潜り、写真を撮って休日を楽しんだだけであった。ただ、ここでしか見つからない魚たちをフィルムに収めようと思っていたし、中には未だ名前の付いていない魚もいたのだ。マルケサスにはダイビング・サービスが一軒しかなく、そのマルケサス・ダイビング・センターのスタッフと一緒に潜った。店のオーナーはここで8年の経験を持つフランス人のザビア・クルヴァ氏だ。

彼のTシャツにはハンマーヘッドシャークに睨まれたダイバーが描かれていた。彼はこう言った“決して失望などさせない。まず9割の確率でこのサメに出会えるよ”と。実際その通りだった、湾のドックからわずか10分で、このサメに遭遇できる典型的な場所に行くことができた。8～10mの火山島の黒い断崖絶壁は、海の中に一気に25mの深みにまで落ち込んで転石帯や砂場に達する。岩肌にあるくぼみ、煙突状の穴、切れ込みなどは小魚達の絶好の棲みかとなる。深場では、数尾かそこらのハンマーヘッドが我々の回りをぐるぐるとパトロールし、時に5mの範囲まで近付いてきた。その上巨大なマンタがよく我々の頭上をかすめた。世界のどこよりも、ここマルケサスにはマンタが多いと思われる。岩の割れ目や穴蔵には小魚がたくさん見られた。タカサゴの仲間の群れが中層をすばしっこく泳ぎ、フエダイの群れとヒメジの一種が仲良く海底でホバリングしていた。我々は毎回ほぼ同じ場所で潜ったが、ザビアは時に我々を入り江や人のいない湾に案内してくれた。そこの大きな洞穴で2回潜水を試みたのだが、運悪く大量のプランクトンのお陰で視界が悪く、せいぜい8～10m位しか見えなかった。

リーガルアンティアス
Pseudanthias regalis（雄）

未記載のハナダイ
Pseudanthias sp.

恐らくここで最も目立つ魚はリーガルアンティアス(RegalAnthias：*Pseudanthias regalis*)だろう。岩肌寄りに数多く見られた。雄は強烈な紫色だが、頭はオレンジイエローで、それが背中の途中まで伸びている。雌はほぼオレンジ一色である。大きなウツボ、特にマスクドモレイ(MaskedMorey：*Gymnothorax breedeni*)のすぐ側にいるのを見る機会が多かった。もう一種のハナダイ、未だ名前が付いていないが、これもこの海域にしか見られない魚でこっちは大変少なかった。雌はサーモンピンクで、からだの中央に横に走る赤い縞模様が特徴だ。ウア・ポウの沖、深さ40mで成熟した雄をただ一回だけ見た。同じく美しいサーモンピンク色をしていて、からだに赤い縞模様のあるものとないものがいたが、尾ビレが真っ



タヒチアンバタフライフィッシュ *Chaetodon trichrous*。
この辺り特産のチョウチョウウオ

一風変わった魚たち

赤なのでよく目立った。尾には上下に白い縁取りが施してある。

ここで一番多く見られたチョウチョウウオはタヒチバタフライフィッシュ(Tahiti Butterflyfish：*Chaetodon trichrous*)だった。地は茶色だが、顔は明るい色で目を通る黒いスジが見られる。インド洋～太平洋に広く分布する普通種のミゾレチョウチョウウオ(*C.kleinji*)に色彩も生活環境もよく似ている。このチョウチョウウオはソシエテ、ツアモツ、及びマルケサス諸島の特産種であるが、逆にミゾレチョウチョウウオはいない。この島々にはチョウチョウウオの仲間は全部で15種類いるのだが、大部分は他の(インド洋～)太平洋域にもいる共通種ばかりである。ただ一つ、マルケサンバタフライフィッシュ(Marquesan Butterflyfish：*Chaetodon declivis declivis*)だけはここにしかいない。深海に棲むティンカーズバタフライフィッシュ(Tinker's Butterflyfish：*C.tinkeri*)の仲間である。この仲間にはハワイ及びマーシャルから来るティンカーズ・バタフライ以外に、ライン諸島から来る近似種の*Chaetodon declivis wilderi*などがある。この魚を求めてここに来たようなものだが、とうとう見つからなかった。マルケサス諸島でも南の場所からしか記録がないのだ。ティンカーズバタフライに似てはいるが、黒い箇所が代わりに黄色くなっている。

キンチャクダイではこれと言って特産のものはない。最も多かったのはコガネヤッコ(レモンピール：*Centropyge flavissima*)であった。イースター島にまで分布を拡げている普通種である。しかしもっとエキサイティングな魚がいた。フレームエンゼルフィッシュ(Flame Angelfish：*C.loricula*)である。この魚は岸壁の底に転がっている大きめの岩石の間に生活している。この魚はグレートバリアリーフからハワイにまで広く分布する普通種だ。真っ赤なからだに黒い縞模様が5、6本入っているのが一般的だが、ここでは全身真っ赤であるばかりか、その縞模様が消え入りそうな個体もあれば、あるのは最初の1本だけと言う個体さえいるのだ。これは新種なのだろうか？　この点をランドール博士に問い合わせたところ、色彩の違いのみであとはまるっきり他のフレームエンゼルフィッシュと変わりない、と教えてくれた。他に棲息するキンチャクダイと言えば臆病なチャイロヤッコ(*C.flavicauda*)だけだが、私達は見ていない。

2種類のベラがまた変わっている。ランドール博士が1999年に記載したカンムリベラ(*Coris*)亜科の仲間で、共にマルケサスの特産種である。一つは最初に見た時イトヒキベラの新種かと思った。13cm位の大きさで、海底で群れを成していた。雄は全体に緑がかった色彩で、頭とからだには濃い茶色のストライプが入っていて、盛んに雌に向かって海底でディスプレイするのだが、上昇しながらヒレを目一杯立たせ、とても素早く体の色を変えるのだ。ヒレが赤くなると同時に、ストライプはブルーになって明るく輝くのだ。一方、雌は目立たない存在で、このような雄の行動にはほとんど無関心の様だ。ランドール博士曰く、このようにディスプレイするカンムリベラの仲間は他にいない、との事だ。

マルケサスには少なくとも6つの特産のスズメダイがいる。最もよく遭遇するのはマルケサンダッシラス(*Dascyllus strasburgi*)だ。これはインド～太平洋に普通に見られるミツボシクロスズメダイ(*D.trimaculatus*)を淡くしたような魚である。幼魚も成魚も大きなイソギンチャクの中で生活している(多分*Stichodactyla mertensii*だろう)。危険を察知すると頭からこのイソギンチャクに突っ込んでゆく。この島々の枝サンゴは、ここ数年来のエル・ニーニョのお陰で壊滅的だ。

他のもう1種のスズメダイには名前が与えられていない。マルケサンサージャント(*Abudefduf* sp.)というスズメダイで、インド～太平洋に広く分布するオヤビッチャ(*A.vaigiensis*)の近似種である。他に少なくとも3種類の学名のないクロミスがいる。いずれもこれと言った魅力に欠ける

フレームエンゼルフィッシュ
Centropyge loricula
ロンリエーション

Coris marquesensis（未成熟の雄）。
この諸島の特産のベラ

Coris hewetti（雄、ディスプレイ中）。これも特産種

マルケサンダッシラス *Dascyllus strasburgi*。特産のスズメダイ

Ostracion whitleyi（雄）。華やかな雄の個体

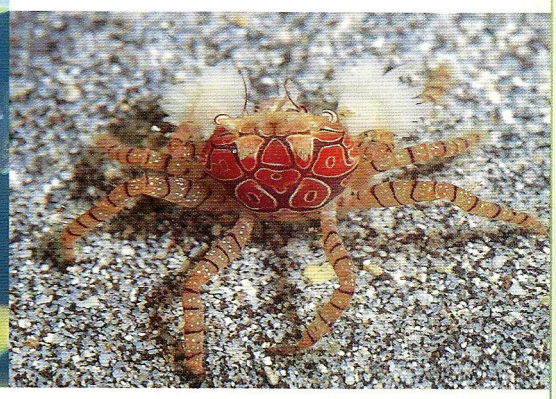
魚だ。他、つい最近記載されたばかりのスズメダイ(*Stegastes robertsoni*)もいる。これは静かな湾内で暮らしていた。この魚は同行したロス・ロバートソン博士に因んで名付けられた魚である。

ハコフグの仲間も5種類見かけた。そのうち、私を最も惹きつけたのがホイットレイズボックスフィッシュ(*Ostracion whitleyi*)だった。私はハワイからやって来たのでこの魚はよく知っているつもりだった。しかしハワイでは茶色と白の雌ばかりが目立ち、あの輝くようなブルーの雄にはまったくと言ってよいほど出会うチャンスはない。ハワイではどうやって繁殖しているのか不思議に思えた。ここでは不思議でも何でもなく、雌よりも大きな青い雄に頻繁に会えたのである。ここマルケサスは、ミッドウェイやハワイからフレンチ・ポリネシアまでいるこの魚の繁栄の中心地なのだろう。

ヨスジフエダイ(Blueline Snapper：*Lutjanus kasmira*)は普通に見られるが、よく見るとその中にヒメジの仲間が混じっている事がある。名付けてミミックゴートフィッシュ(Mimic Goatfish：*Mulloidichthys mimicus*)。捕食者から見たら、ヒメジはフエダイよりも旨そうに見える。だからこのフエダイの中に紛れ込んで身を隠そうというのだ。よほど注意してみないと区別ができないほどよく似ている。ただこのヒメジは尾がフォーク状に切れ込み、背ビレは2つに分かれている。フエダイでは背ビレは1枚だけだ。この島々の特産種である。

ハギにも面白い仲間が2種類ばかりある。ひとつはつい最近記載されたばかり

ヨスジフエダイとヒメジの仲間
Mulloldichthys mimicus



ボクサークラブ *Lybia tessellata*。
マルケサス諸島に居るバリエーション

尽きせぬ魅力

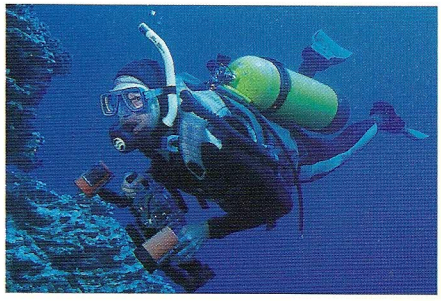
の、モンツキハギ(Orangeband Surgeonfish：*Acanthurus olivaceus*)の近縁種となる魚で、学名を*Acanthurus reversus*という。この魚のオレンジ色のバンドは、モンツキハギのそれよりも長い事で区別できる。もう一つがシマハギの亜種、*Acanthurus triostegus marquesensis*という種類だ。シマハギでは尾ビレの付け根に黒いバンドを付けているが、本種は2個の黒い斑点を持つ点が違う。他に特産のブダイ*Scarus koptea*、ハタの*Epinephelus irroratus*、及びフサカサゴの仲間で未記載の*Scorpaenopsis* sp.を見ている。

私がついに見ることのできなかった2種類を挙げておこう。マルケサントビー(Marquesan Toby：*Canthigaster marquesensis*)というキンチャクフグの仲間と、クロユリハゼの仲間(Dartfish：*Ptereleotris melanopogon*)である。前者は、ハワイの深場では時に見つかるランタントビー(*Cepilampra*)によく似た魚だ。

最後に紹介するのはカニの仲間で、ボクサークラブというやつだ。インド～太平洋に広く見られる個体とは色彩が全く異なっている(*Lybia tessellata*)。岩石の間には普通に見られ3個体を採集して、新種かなと思いながらピーター・デイヴィット博士に聞いてみた。しかしこのカニの権威はこう答えた。“色だけだよ、他と違うのは”と。

我々の探検は興奮し切ったままで終わった。なんと最終日のしかもラストダイブで、学者ジョーン・アール氏が1mを超すドクウツボ(*Gymnothoraxjavanicus*)に噛まれ、近くの洞穴に引きずり込まれてしまう事件が起こったのだ。このウツボは別に怒っていた訳でも何でもない。ただ彼の腕を掴んだまま、針のような鋭い歯で彼の背中と腕に穴を開け、力一杯引き裂いてしまったのだ。腱や神経まで裂けてしまい、誰が見ても明らかなように深い苦痛を背負ったまま、ボートに戻るまでに30分もかかった。血の滲んだタオルを巻いた腕は垂れ下がったままであった。町のクリニックに言って診てもらったところ、幸いにして優れた治療を受けることができたのだった。若い頃パリに住み、そこでの生活に疲れ切ったフランスの老女医は、ここヌク・ヒヴァに安住の地を見つけたのだ。彼女は何時間かかかって彼の手に取り組み、丁寧に傷口を縫い合わせ腱を再生した。もしここがハワイだったら、こんなに速くて巧い手ほどきには巡り会えなかっただろう。数週間後にはほとんど回復している。

ここマルケサス諸島には見るべきものが他にもいっぱいある。そう、陸上でも海底でも。我々はたった2週間で、ただサンプルを拾って帰って来たようなものだ。既にジョーン・アールとロス・ロバートソンの2人は南の島々に潜る計画を立てている。そこで、*Chaetodon declivis declivis*を見ようという魂胆なのだ。



筆者紹介

John P.Hoover（ジョン・P・フーバー）
オアフ島在住のダイバー。過去にベストセラー数冊を上梓している。少年時代から海水生物の飼育経験を持つ。海底に居ない時は医学図書館勤務でコンピューター関連の仕事をする。現在ハワイの魚類図鑑（改訂版）を執筆中。他の図鑑への写真提供、雑誌への寄稿も多数。本誌にはミッドウェイ、オマーンに続く3回目の寄稿。
米国のスコット・マイケルの有名なサイト（http://www.coralrealm.com/）の中心メンバーの一人として活躍中。

訳者

田中宏幸（Hiroyuki Tanaka）
宮崎市在住の内科医師。本誌を含め珊瑚礁の魚のエッセイなどを手がける以外は開業医の仕事に専念。現在イトヒキベラ／クジャクベラやニセスズメの図鑑を執筆中。海水魚飼育歴26年。日本魚類学会、宮崎SeaQuest会員。同上サイトのアドバイザーのひとりで寄稿もしている。